

## ウル第三王朝時代ウンマ文書からみた マダガのアスファルト

前田 徹

### はじめに

シュメール・ウル第三王朝時代直前（前 2150 年ころ）のラガシュ市の王グデアは、ラガシュの主神ニンギルスのために神殿を造営するに際して、石や木材やアスファルトなどの資材を各地から集めた。資源の乏しいシュメールにおいては外からの輸入に頼るはかなかったのであるが、その広がりには現在のトルコ、シリア、イラク、イランにまたがっている。その中の一つ、アスファルト（*esir<sub>2</sub>*）について、グデアは「神判の川の山であるマダガから、アスファルトを持ってこさせ、（それをもって）（ニンギルス神の）エニンヌ神殿の外壁を造った」と誇る<sup>1)</sup>。マダガは、現在のキルクーク付近に指定されており [Frayne 1999: 157-158]、シュメールの諸都市からは約 500 km の距離がある。そこから持ってきたアスファルトを、壁の補強剤として使ったのである。

マダガからのアスファルトについては、グデアの時代よりも少し下ったウル第三王朝時代のラガシュやウンマ出土の経済文書からも確認される。本稿ではウンマ文書を中心に、マダガへの旅程などの詳細を検討することと、ウンマにおけるアスファルトの管理について考えたい。ただし、関連する個々の文書の精査とその関連性の把握はいまだ途上にあり、問題の所在をある程度明らかにすることで、今後の研究の一助にすることが目的になる。

### I マダガ往還

ウル第三王朝時代のウンマ文書においてマダガからのアスファルトは、次のような文書から確認される。物品集計表である STA 11 には、各種のアスファルトとその量を記録した後にもとめとして「マダガから運ばれた（もの）*ma<sub>2</sub>-da-ga-ta DÜ-a*」とある。MVN 16, 1257

---

1) Statue B vi 51-58: *ma-ad-ga<sup>ki</sup>, ħur-sag-id<sub>2</sub>-lu<sub>2</sub>-ru-da-ta, esir<sub>2</sub>-gu<sub>2</sub>-ŠAR<sub>2</sub>xKAS, im-ta-e<sub>3</sub>, ki-sa<sub>2</sub>-e<sub>2</sub>-ninnu-ka, mu-ni-du<sub>3</sub>,*  
マダガからのアスファルトについては、Cylinder A xvi 7-12 に関連記事がある。*ma<sub>2</sub>-ĥa-u<sub>3</sub>-na ma<sub>2</sub>-na-lu-a, esir<sub>2</sub>-a-ba-al esir<sub>2</sub>-igi.esir<sub>2</sub> im-babbar-ra, ħur-sag ma<sub>2</sub>-ad-ga-ta, nig<sub>2</sub>-gur<sub>11</sub>, ma<sub>2</sub>-še-gan<sub>2</sub>-du-a-gin<sub>7</sub>, gu<sub>3</sub>-de<sub>2</sub>-a en<sup>d</sup>-in-gir-su-ra, im-ma-na-us<sub>2</sub>*

には、穀粉 (dabin) を「アスファルトを買うためにマダガへ (運んだ), 都市支配者エンシの命令によって esir<sub>2</sub>-ra šam<sub>2</sub>-šam<sub>2</sub>-de<sub>3</sub>, ma<sub>2</sub>-da-ga-še<sub>3</sub>, inim-ensi<sub>2</sub>-ta」 とある。SNS 331 は、「マダガ (へ) の穀粉の会計表 nig<sub>2</sub>-ŠID-ak zid<sub>2</sub> ma<sub>2</sub>-da-ga」であるが、その内訳に「アスファルトを買うための穀粉, dabin, esir<sub>2</sub>-a šam<sub>2</sub>-a」という項目がある。最後に労働記録である AAICAB 1924-650 には「マダガへ行った。マダガから戻った。そしてウンマ市で船からアスファルトをおろした ma<sub>2</sub>-da-ga-aš gin-na, ma<sub>2</sub>-da-ga-ta gur-ra, u<sub>3</sub> umma<sup>ki</sup>-a ma<sub>2</sub> esir<sub>2</sub> ba-al-la」とあり、一連のマダガ行きがアスファルトを求めてのものであったことが知られる。

アスファルトを求めるマダガへの旅の日数について、ラガシュ文書では残念ながら記載がないが、ウンマ文書には次のような日数が記録されている。

BIN 5,137 (S 46) 2 guruš itu-3-še<sub>3</sub> a<sub>2</sub>-bi u<sub>4</sub>-180-še<sub>3</sub>; ma<sub>2</sub>-da-ga[-aš] gin-na 「2人, 3ヶ月, 労働日数180日; マダガへの旅程」

TENS 442 (S 46) 2 guruš itu-3-še<sub>3</sub>; ma<sub>2</sub>-da-ga-aš gin-na 「2人, 3ヶ月; マダガへの旅程」

BIN 5,272 (AS 3) 1 guruš itu-2-še<sub>3</sub>, a<sub>2</sub>-bi u<sub>4</sub>-60-še<sub>3</sub>; ma<sub>2</sub>-da-ga-aš gin-na 「1人, 2ヶ月, 労働日数60日; マダガへの旅程」

TYBC 0747 (AS 3) 1 guruš itu-min-eš<sub>3</sub> (=itu-2-še<sub>3</sub>); ma<sub>2</sub>-da-ga DUB-a 「1人, 2ヶ月; マダガの旅程」

TPTS 337 (AS 4) 2 guruš itu-2-še<sub>3</sub>; ma<sub>2</sub>-da-ga DU-a 「2人, 2ヶ月, マダガの旅程」

TPTS 340 (AS 7) 1 guruš u<sub>4</sub>-70-še<sub>3</sub>; ma<sub>2</sub>-da-ga-aš gin-na 「1人, 70日; マダガへの旅程」

TPTS 366 (AS 7) 1 a-du-du, u<sub>4</sub>-55-še<sub>3</sub>; ma<sub>2</sub>-da-ga-aš gin-na 「1 (人) アドゥドゥ, 55日, マダガへの旅程」

TPTS 335 (AS 8?) 3 guruš ša<sub>3</sub>-gu<sub>4</sub> u<sub>4</sub>-75-še<sub>3</sub>; ma<sub>2</sub>-da-ga gin-na 「3人シャグ (直営地耕作人配下の牛飼), 75日, マダガの旅程」

TPTS 338 (AS 9) 1 guruš u<sub>4</sub>-75-še<sub>3</sub>; ma<sub>2</sub>-da-ga DU-a 「1人, 75日, マダガの旅程」

UTAMI 1612 (AS 9) 3 guruš u<sub>4</sub>-75-še<sub>3</sub>; ma<sub>2</sub>-da-ga gin-na 「6人, 75日, マダガの旅程」

MVN 14, 310 (SS 2) 2 guruš itu-2-še<sub>3</sub>, ma<sub>2</sub>-da-ga-aš gin-na, nig<sub>2</sub>-gu<sub>2</sub>-na ba-al-la ša<sub>3</sub> umma<sup>ki</sup> 「2人, 2カ月, マダガへの旅程, 資材 (アスファルト) を (船から) おろした。ウンマ市において」

SS 6 65日:

AAICAB, 1924-650 : itu-<sup>d</sup>dumu-zi mu-<sup>d</sup>šu-<sup>d</sup>suen lugal-e na-ru<sub>2</sub>-a-maḥ mu-du<sub>3</sub>-a u<sub>4</sub>-20-am<sub>3</sub> im-da-gal<sub>2</sub>-ta, itu-sig<sub>4</sub>-giš-i<sub>3</sub>-šub-ba-ga<sub>2</sub>-ra, mu <sup>d</sup>šu-<sup>d</sup>suen lugal-e ma-da

za-ab-ša-li<sup>ki</sup> mu-ḥul<-ta> u<sub>4</sub>-15-am<sub>3</sub> im-da-gal<sub>2</sub>-la-še<sub>3</sub>; ma<sub>2</sub>-da-ga-aš gin-na, ma<sub>2</sub>-da-ga-ta gur-ra, u<sub>3</sub> umma<sup>ki</sup>-a ma<sub>2</sub> esir<sub>2</sub> ba-al-la 「シュシン6年の第12月10日からシュシン7年第2月15日まで<sup>2)</sup>、マダガへ行った、(そして)マダガから戻った、そして、ウンマにいてアスファルトを船からおろした」

以上のようにマダガ往還に要した日数として55日から90日の数字が挙がっており、マダガへアスファルトを求める旅は2～3ヶ月の長期に及ぶ大事業であった。

この旅程の重要性は先に示したように「都市支配者エンシの命令によって」おこなわれることから理解される。都市支配者が、マダガから戻った船のためにシスクル祭儀 siskur<sub>2</sub> ma<sub>2</sub> ma<sub>2</sub>-da-ga-ta gin-na 用である穀粉や羊を受領していることも [MVN 16, 676; MVN 16, 745], その重要性を示すものであろう<sup>3)</sup>。

長期に及ぶマダガ行きであるが、アスファルトという重量物の運搬ということもあってか船を利用したようである。ウンマでは先に示した例 [AAICAB, 1924-650] の「ウンマにいてアスファルトを船からおろした」の他に、「5日間、マダガの船を曳いた u<sub>4</sub> 5-še<sub>3</sub> ma<sub>2</sub> ma<sub>2</sub>-da-ga gid<sub>2</sub>-da」 [TYBC 0880, TYBC 0858]<sup>4)</sup>、「マダガから戻った船のためのシスクル祭儀 siskur<sub>2</sub> ma<sub>2</sub> ma<sub>2</sub>-da-ga-ta gin-na」 [MVN 16 676; MVN 16 745] などがある。ラガシュでは、より直截に、マダガにおいて船頭 (ma<sub>2</sub>-lah<sub>4</sub>) に糧食を支給する記録が残されている [MVN 12,120; MVN 5,157; TCTI 2, 3593; TCTI 2, 3598]<sup>5)</sup>。

マダガへは常時行ったのではなく、1年のなかで特定の時期にマダガ往還が実施されたようだ。ラガシュにおいてもウンマにおいてもマダガ関連文書中に月名が記載される場合、年の後半の9月から11月にかけての月に集中している。ウンマ文書において月名が記されるのは次のような文書である<sup>6)</sup>。

S 25 xi: CCTB 2,028 gu-kilib; KU-ga ma<sub>2</sub>-da-ga-še<sub>3</sub> su-uš

- 2) 日付表記の一つ u<sub>4</sub>-x im-da-gal<sub>2</sub> については、Maeda, T. (2000) On the Ur III Calendar, ASJ 21 (in press) を参照のこと。
- 3) 「マダガ (のために) 穀粉の集計表」である SNS 331 には、3.3.2. 5 sila<sub>3</sub> dabin gur, 0.1.3. zid<sub>2</sub>-sig<sub>15</sub>, 0.1.0. eša, siskur<sub>2</sub> u<sub>3</sub> zi-ga, DUB ensi<sub>2</sub> 「3 グル 205 シラのダビン穀粉, 90 シラの良質のジド穀粉, 60 シラのエシャ粉, シスクルと支出, 捺印者は都市支配者」という項目がある。このシスクルもマダガから戻った船のための祭儀であろう。
- 4) 両文書は労働集団の長が相違するが、同一作業の記録である。
- 5) MVN 12,120 の内容は集計表 CT 5, 33: 17750 に書き写されている。CT 5, 33: 17750 に集計された内容に合致する文書としては、その他に、MVN 5,148, MVN 12,124, MVN 12,93, Limet, RA 62, 24, MVN 12,34, MVN 12,103 がある。これらはすべてマダガ行きに関係した労働者への大麦支給記録である。こうした対応関係から、集計表 CT 5,33: 17750 はマダガを明示しないが、シュルギ 46 年 9 月から 11 月の 3 カ月に支出されたマダガ関係の大麦に関わる記録であろう。その他に CT 5,33: 17750 と大麦量が異なるが、集計表の元となったと推定される小粘土板文書として、MVN 12,78, DTCR 216, MVN 12,127, MVN 2,17 がある。
- 6) ラガシュにおいて、月名が記されるマダガ関係文書  
S 46 ix: Gomi, Orient 16,135, MVN 12,34  
S 46 x: MVN 12,78, MVN 5,148, MVN 12,93, Limet, RA 62,24, MVN 12,103 ↗

S 38 x: MVN 20, urudu.gi<sub>2</sub>-dim, urudu.ḥa-zi-in, ma<sub>2</sub>-da-ga<-aš?>

S 38 xi: NATH 344 giš-gi, ma<sub>2</sub>-da-ga-aš

SS 2 ix: UTAMI 4, 2624 gi-gur dub zid<sub>2</sub>-munu<sub>4</sub> ba-an-si, ma<sub>2</sub>-da-ga-še<sub>3</sub>

SS 2 x-xi: AAICAB, 1911- 170 še-ba ma<sub>2</sub>-da-ga

SS 6 xii 10 ~ SS 7 ii 15: AAICAB, 1924 - 650 ma<sub>2</sub>-da-ga-aš gin-na, ma<sub>2</sub>-da-ga-ta gur-ra, u<sub>3</sub> umma<sup>ki</sup>-a ma<sub>2</sub> esir<sub>2</sub> ba-al-la

9月から11月という時期は、農作業の播種が終わり、12月もしくは年が明けてからの収穫作業が開始されるまでの中間期であり、いわば農閑期を利用した作業であったように思われる。

ただし最後に挙げた AAICAB, 1924 - 650 では、12月10日から2月15日までの期間になっている。この期間はまさしく収穫作業のもっとも多忙な時期にあたる。こうした時期でのマダガ行きは、通常でない特別な事情、例えばウンマの主神シャラの神殿造営が佳境に入り、緊急にアスファルトが必要になったことなどを想定すべきかも知れない。

ウンマ文書には「アスファルトを買うために」と書かれており、マダガ現地において代価を払っての購入によってアスファルトを手にしたことが予想される。ただし、MVN 20, 4には、「2個の銅製すき、3個の銅製おの、ダダガからルガルイトッダが受け取った。マダガ(へ) 2 urudu.gi<sub>2</sub>-dim<sup>7)</sup>, 3 urudu.ḥa-zi-in (axe), ki da-da-ga-ta, lugal-itu-da, šu ba-ti, ma<sub>2</sub>-da-ga<-aš?>」とあり、すきとおのがマダガへもって行かれた。これらは武器とも考えられるが、アスファルトを採取する作業用である可能性も捨てきれない。確定できないがウンマからマダガへ行く人々はアスファルトの運搬だけでなく、実際にアスファルト採取の作業にも従事したと考えることが出来る<sup>8)</sup>。マダガ往還には、船頭や労働集団構成員がその任務に就いているが、その他にも、ラガシュ文書では鍛冶工(simug)が関与する。すきやおのがマダガにもって行かれているので、そうした道具の修復が任務であったかも知れない<sup>9)</sup>。

↘ S 46 xi: DTCR 216, MVN 12,124, MVN 12,127, MVN 2,17, MVN 12,120,  
AS 4 x: MVN 5,157  
AS 5 x: TCTI 2, 3449  
SS 5 xi: TCTI 2, 4095 (si-i<sub>3</sub>-tum še ma-ad-da-ga)  
< > xi: TCTI 2, 3598

7) テキストの翻字では urudu.e<sub>2</sub>-dim とあるが、これは KID-dim = gi<sub>2</sub>-dim, *gidimmu* “spade” が正しいと思われる。

8) すきとおのの受領者はルガルイトッダであるが、彼は、1カ月後のシュルギ38年第11月の日付がある NATH 344 では、マダガへのために、木材(giš-gi)を受け取っている。関連するものと思われる。

9) TCTI 2, 3449 (AS 5 x): 2.0.0. še gur-lugal, še erin<sub>2</sub> simug? ma<sub>2</sub>-da-ga, ki lu<sub>2</sub>-kal-la-ta, DUB na-ba-ša<sub>6</sub> dumu ur-<sup>d</sup>nin-giš-zi-da, ga<sub>2</sub>-nun-ta: seal: na-ba-ša<sub>6</sub>/ dumu ur-<sup>d</sup>nin-giš-zi-da/simug/注5で示した集計表 CT 5,33: 17750 が、マダガ往還に関与する大麦支出を記録するのであれば、この文書では、大工(nagar)が大麦を受給しており、彼は船の修復を役目とするものであろう。さらにこの文書には、使節(lu<sub>2</sub>-kin-gi<sub>4</sub>-a), 書記(dub-sar)も受給しており、シスク↗

アスファルトを求めるマダガの旅には運搬等に多くの労働者を必要としたであろうが、ウンマにおいては一般に一つの任務を一つの労働集団に任すのではなく、各労働集団から少人数の小隊を分けて共同させていた。つまり、ウンマにおける労働集団は、特別な任務を任されるという特化された集団でなく、多種多様な仕事に対応できる汎用的な集団編成とその運用という体制を維持していたのであり [前田 2000 a], マダガ往還もその例にもれない。例えば, AAICAB, 1924-650 において, 10 の労働集団から 2 名から 5 名が分けられ, 計 35 名がマダガへ行っている。

5 guruš, ugula ur-lugal,	5 人 長はウルルガル
4 guruš ugula ur-mes,	4 人 長はウルメス
4 ugula lugal-itu-da,	4 人 長はルガルイトゥダ
3 ugula šeš-kal-la,	3 人 長はシェシュカルラ
2 ugula lugal-ku <sub>3</sub> -zu,	2 人 長はルガルクズ
2 ugula lu <sub>2</sub> -dingir-ra,	2 人 長はルディンギルラ
4 ugula id <sub>2</sub> -pa-e <sub>3</sub> ,	4 人 長はイドパエ
4 ugula lu <sub>2</sub> -du <sub>10</sub> -ga,	4 人 長はルドゥッガ
3 ugula ur-am <sub>3</sub> -ma,	3 人 長はウルアンマ
4 ugula lu <sub>2</sub> -dingir-ra dumu ḥe <sub>2</sub> -ma-du	4 人 長はヘマドゥの子ルディンギルラ

ウンマ文書には労働集団の 1 年間の労働集計表と呼びうる書式が存在するが、その中で、従事した各種の作業項目の中にマダガ往還が含まれる例がある。ルダニを長とする労働集団のアマルシン 3 年の一年間の集計表において [TCL 5 5674], 人数が欠けて不明ながら, 60 日間マダガへ行っている。直営地管理人ルガルグエ配下の耕作集団の労働集計表においては, アマルシン 3 年に 1 人が 2 カ月間マダガに行っている [BIN 5,272]。他の作業と同列にマダガ往還が記されている。このようにマダガのアスファルトを扱う特別な労働集団が存在したのではない。

## II アスファルトの管理と労働管理

ウンマにおけるマダガ往還の労働文書において捺印者はルガルマグルレの子アッバギナ (ab-ba-gi-na dumu lugal-ma<sub>2</sub>-gur<sub>3</sub>-re) とギルニの子ルガルイトゥダ (lugal-itu-da dumu gir<sub>3</sub>-ni) の二人である。この二人がマダガ行きの責任者であった。ルガルマグルレの子アッバギナは, アマルシン 1 年, 3 年, 5 年, シュシン 6 年の文書で捺印者であ

ㄨ ル用の支出も記録されている。シスクルはウンマ文書でも確認され同種の祭儀がラガシュにおいてもおこなわれたと思われ, また, マダガ行きには労働集団のみならず使節や書記が同行したことを窺わせる。

り<sup>10)</sup>、ギルの子ルガルイトゥダは、アマルシン4年、7年、8年、9年、シュシン2年の文書で捺印者である<sup>11)</sup>。アッバギナとルガルイトゥダが交互に任務に就いたとも考えられるが、アマルシン1年にマダガから運ばれた各種のアスファルト記録では、両人がギル gir<sub>3</sub> 職として現れているので、即断は出来ない。ともあれ、マダガからアスファルトを運ぶ労働者の会計上の管理はルガルイトゥダとアッバギナが行っていたことは確かであろう。

ここで問題にしたいのは、アッバギナやルガルイトゥダが労働記録でなく穀粉などを記録する文書で捺印者となる場合である。例えば、MVN 16 1257 には次のような記事がある。

0.4.0. dabin,	240 シラのダビン穀粉
esir <sub>2</sub> -ra sa <sub>10</sub> -sa <sub>10</sub> -de <sub>3</sub> , ma <sub>2</sub> -da-ga-še <sub>3</sub> ,	アスファルトを買うために、マダガへ
ki ur- <sup>d</sup> suen-ta,	ウルスエンから
DUB ab-ba-gi-na,	アッバギナの捺印書において
inim-ensi <sub>2</sub> -ta;	(ウンマの) 支配者の命令によって
mu <sup>d</sup> su- <sup>d</sup> suen lugal-e na-ru <sub>2</sub> -a-maḥ	シュシン王が大きな境界石を建てた
mu-du <sub>3</sub>	年 (シュシン6年)
seal: ab-ba-gi-na/ dub-sar / dumu lugal-ma <sub>2</sub> -gur <sub>8</sub> -re	
印章銘: アッバギナ, 書記, ルガルマグルレの子	

10) DUB ab-ba-gi-na (dumu lugal-ma<sub>2</sub>-gur<sub>8</sub>-re)

- AS 1 TYBC 0686 1 guruš u<sub>4</sub> 60?-še<sub>3</sub>, ma<sub>2</sub>-da-ga-še<sub>3</sub> gin-na ugula lugal-gu<sub>4</sub>-e  
 AS 3 BIN 5,272 1 guruš itu-2-še<sub>3</sub>, a<sub>2</sub>-bi u<sub>4</sub>-60-še<sub>3</sub>, ma<sub>2</sub>-da-ga-aš gin-na; nig<sub>2</sub>-šID-ak lugal-gu<sub>4</sub>-e nu-banda<sub>3</sub>-gu<sub>4</sub>:  
 AS 3 TCL 5,5674 [ ] guruš u<sub>4</sub>-1-še<sub>3</sub> ma<sub>2</sub>-da-ga-aš gin-na; nig<sub>2</sub>-šID-ak a<sub>2</sub> erin<sub>2</sub>-na, lu<sub>2</sub>-<sup>d</sup>da-ni ugula, itu-8-kam  
 AS 3 TYBC 0747 1 guruš itu-2-še<sub>3</sub>? ma<sub>2</sub>-da-ga DUB-a ugula da-du-mu  
 AS 5 TYBC 0880 2 guruš —, u<sub>4</sub> 5-še<sub>3</sub> ma<sub>2</sub> ma<sub>2</sub>-da-ga gid<sub>2</sub>-da, —, ugula lugal-ma<sub>2</sub>-gur<sub>8</sub>-re  
 AS 5 TYBC 0858 3 guruš —, u<sub>4</sub> 5-še<sub>3</sub> ma<sub>2</sub> ma<sub>2</sub>-da-ga gid<sub>2</sub>-da, —, ugula lugal- [ ]  
 SS 6 xii 10 AAICAB, 1924-650 guruš ugula ur-lugal, ur-mes, lugal-itu-da, šeš-kal-la, lugal-ku<sub>3</sub>-zu, lu<sub>2</sub>-dingir-ra, id<sub>2</sub>-pa-e<sub>3</sub>, lu<sub>2</sub>-du<sub>10</sub>-ga, ur-am<sub>3</sub>-ma, lu<sub>2</sub>-dingir-ra; ma<sub>2</sub>-da-ga-aš gin-na, ma<sub>2</sub>-da-ga-ta gur-ra, u<sub>3</sub> umma<sup>ki</sup>-a ma<sub>2</sub> esir<sub>2</sub> ba-al-la

11) DUB lugal-itu-da dumu gir<sub>3</sub>-ni

- AS 4 TPTS 337 2 guruš itu-2-še<sub>3</sub>, ma<sub>2</sub>-da-ga DU-a, ugula ur-mes  
 AS 7 TPTS 340 1 guruš u<sub>4</sub>-70-še<sub>3</sub> ma-da-ga-aš gin-na, ugula ba-ša<sub>6</sub>  
 AS 8? TPTS 335 3 guruš ša<sub>3</sub>-gu<sub>4</sub> u<sub>4</sub>-75-še<sub>3</sub> ma<sub>2</sub>-da-ga gin-na, ugula lugal-nesag<sub>2</sub>-e,  
 AS 9 TPTS 338 1 guruš u<sub>4</sub>-75-še<sub>3</sub>, ma<sub>2</sub>-da-ga DU-a, ugula da-du-mu,  
 AS 9 UTAMI 1612 3 guruš u<sub>4</sub>-75-še<sub>3</sub>, ma<sub>2</sub>-da-ga gin-na, ugula lugal-itu-da,  
 SS 2 MVN 14,310; 2 guruš itu-2-še<sub>3</sub>, ma<sub>2</sub>-da-ga-aš gin-na nig<sub>2</sub>-gu<sub>2</sub>-na ba-al-la ša<sub>3</sub> umma<sup>ki</sup>, ugula ur-sig<sub>5</sub>:  
 SS 2 UTAMI 5,3147 5 guruš itu-2-še<sub>3</sub>, ma<sub>2</sub>-da-ga-aš du-a, ma<sub>2</sub>-da-ga-ta gur-ra, u<sub>3</sub> ma<sub>2</sub> ba-al-la, ugula ab-ba-gi-na,

なお、シュルギ46年の二枚の文書では、捺印者は書かれないで、ギル (gir<sub>3</sub>) としてルガルネサグエの名が記されている (BIN 5,137, TENS 442)。シュルギ治世とアマルシン治世以降で書式なり、管理方式が異なるのであろうか? この疑問は今後の課題としたい。

「アスファルトを買うために」とあることから、これは一見したところアスファルト購入代金としての穀粉をアッバギナが受領した記録に見える。次の例でも、アッバギナのもので集計された「マダガ(に支出される)穀粉」の一部が、購入用とされている。

SNS 331 (AS 2)

27.3.0. dabin gur,	27 グル 180 シラのダビン穀粉
0.1.0. eša,	60 シラのエシャ穀粉
0.1.3. zid <sub>2</sub> -sig <sub>15</sub> ,	90 シラの良い質のジド穀粉
ki ur- <sup>d</sup> šara <sub>2</sub> -ta	ウルシャラから
ša <sub>3</sub> -bi-ta	その中から
5.1.4. dabin gur esir <sub>2</sub> -a šam <sub>2</sub> -a	5 グル 100 シラのダビン穀粉, アスファルトを買うために
3.3.2. 5 sila <sub>3</sub> dabin gur,	3 グル 205 シラのダビン穀粉
0.1.3. zid <sub>2</sub> -sig <sub>15</sub> ,	90 シラの良い質のジド穀粉
0.1.0. eša,	60 シラのエシャ穀粉
siskur <sub>2</sub> u <sub>3</sub> zi-ga,	シスクル祭儀用と支出物
DUB-ensi <sub>2</sub> -ka	(ウンマの) 支配者の捺印書において
šu.nigin <sub>2</sub> 9.0.0. 5 sila <sub>3</sub> dabin	合計 (略)
šu.nigin <sub>2</sub> 0.1.3. zid <sub>2</sub> -sig <sub>15</sub>	
šu.nigin <sub>2</sub> 0.1.0. eša zi-ga-am <sub>3</sub>	
la <sub>2</sub> -NI 18.0.5. 5 sila <sub>3</sub> dabin gur	残高 (略)
nig <sub>2</sub> -ŠID-ak zid <sub>2</sub> ma <sub>2</sub> -da-ga	マダガ (への) 穀粉の会計表
ab-ba-gi-na dumu lugal-ma <sub>2</sub> -gur <sub>8</sub> -re	ルガルマグルレの子アッバギナの
mu <sup>d</sup> amar- <sup>d</sup> suen lugal-e ur-bi <sub>2</sub> -lum <sup>ki</sup> mu-ḫul.	アマルシン 2 年

アスファルト購入用の穀粉がアッバギナの管理下にあったと一見みなしうる文書内容であるが、労働管理が主任務であるアッバギナが、物品であるアスファルトそのものの管理者でもあったと断定するには、躊躇される。それは、これらの文書にはアスファルトの量がまったく記録されていないことが一つの理由であり、実際ルガルイトゥダとアッバギナが捺印者となる文書においてアスファルトの量を記録したものは残っていない。マダガから運ばれてきた各種のアスファルトとその量を唯一記録するのは、STA 11 であるが、この文書においてルガルイトゥダとアッバギナの名が記されているものの、ギル職としてであり、捺印者ではないことが判断を躊躇させる理由である。

捺印者とギル職の相違に関して、例えば、ウンマにおける船の運行に関しては捺印者は運行に責任を持ち、船に積載された物品に関する文書において、彼らはギル職につくのみである [前田 2000 b]。ギルの正確な職務は不詳であるが、一般的に物品の輸送に実際に関わる者と考えられている。積載物は別の会計文書が作成されたのである。マダガからのアスファ

ルトを記録した STA 11 では、ルガルイトゥダとアッバギナはギル職であって、彼らがマダガからアスファルトを運ぶことの実行者であっても、アスファルトの会計上の責任者ではない。この文書では捺印者はウルシュルパエであり、彼がアスファルトの管理者である。

マダガ往還関連文書において捺印者たるルガルイトゥダとアッバギナは往還という作業に責任を持つだけであること、さらに彼らがアスファルトそのものを管理した文書において捺印者となる文書は現時点では存在しない。こうした理由から、先の2文書に挙がる穀粉は、「アスファルトを買うために」と明示されているにしても、強引な解釈であることを十分承知するのであるが、「アスファルトを買うために（行く労働者のため）」と解釈すべきであって、アスファルトを購入するための交換品を指示するのではないであろう。

事実、ウンマにおいても穀粉をマダガ往還の労働者の糧食として支出した事例は TENS 446 に記録されている。ラガシュではより頻繁に、「マダガ（に行く者への）糧食 ša<sub>3</sub>-gal ma<sub>2</sub>-da-ga」としての穀粉（dabin）が記録されている<sup>12)</sup>。

MVN 16, 1257 における 240 シラの穀粉は、1人1シラの支給であるとすれば、60日間の日程として4人への支給となる。これは労働集団から分けられた一小隊への支給と考えることが出来る。SNS 331 に記載された5グル100シラ（=1,600シラ）の穀粉は、同様の計算をすれば、60日間の日程で26 2/3人、つまり約27人への支給となり、マダガに行く労働者全体への支給量に適合する。このように、糧食としてもあり得ない数値ではなく、むしろ糧食と考えるのに適した穀粉量であろう。このような解釈が成り立つとすれば、ここで検討したマダガへの穀粉に関わる2枚の文書 MVN 16, 1257, SNS 331 は、マダガへの往還という労働とそれに関わる諸費用の記録であって、アスファルト購入用の物品を含まない文書と考えることが出来る。つまり、マダガにおいてどのようにしてアスファルトを入手したのかという点に関しては、なお不明であると言わざるを得なくなる。

捺印者とギル職の相違に注目してマダガ関連文書を見ておきたい。

UTAMI 4, 2862 は、穀粉などをルガルイトゥダが捺印者としてウルシュルパエから受け取った記録であるが、これは糧食用等の穀粉であろう。

UTAMI 4, 2624 は、「穀粉を入れるためのかご gi-gur dub 0.1.0.-ta zid<sub>2</sub>-munu<sub>4</sub> ba-an-si」をルガルイトゥダが受領した記録であり、彼は捺印者である。これは、糧食用の穀粉を入れるかごのことであろう。

Fales, Prima, n. 42 では、「魚 ku<sub>6</sub>-izi をマダガへ」としてアッバギナが受領し、捺印者となっている。糧食用であろう。この場合、アッバギナの捺印文書は、ルカルラからウルシュルパエが受け取っている（DUB ab-ba-gi-na, ki lu<sub>2</sub>-kal-la-ta, ur-<sup>d</sup>šul-pa-e<sub>3</sub>, šu ba-ti）。

TYBC 1160 では、ルガルイトゥダが藺草? (u<sub>2</sub>.nin<sub>9</sub>) を受領し、捺印者となっている。この草が何に使用されたか不明であるが、アスファルトの代価などでなく、マダガに行く旅程

12) 注5に示した CT 5,33:17750 と関連文書。



に必要なものであったのであろう。

アッバギナは、TYBC 0851において、7グル90シラの大麥、マダガへ行く人の糧食(7.1.3. še gur lugal, ša<sub>3</sub>-gal lu<sub>2</sub> ma<sub>2</sub>-da-ga) に関して、「(倉庫長) イルの捺印文書をアッバギナからルギナが取り保管した DUB ir<sub>11</sub>, ki ab-ba-gi-na-ta, lu<sub>2</sub>-gi-na ba-an-dib」と書かれている。糧食用大麥に関してアッバギナが会計上責任ある文書を残したことを示している。

捺印することが会計上の責任を果たす文書を残すことを意味すると思われるが、ルガルイトゥダやアッバギナがマダガに関してギル職である文書も存在する。

TYBC 0808 では、油壺用の革ふた? (kuš.dug sakkan ħe<sub>2</sub>-sud) に関して、製皮人のアカルラ (a-kal-la lu<sub>2</sub> ašgab) からウルシュルパエが受領し捺印者となったとき、ギルとしてルガルイトゥダの名が示されている。この革製品はウルシュルパエの会計簿で処理されるのであり、マダガにもって行くという行為に関わってルガルイトゥダの名が挙がるのであろう。

MVN 1, 233 では、木材 giš<sub>5</sub> が nig<sub>2</sub>-dab<sub>5</sub> ma<sub>2</sub>-da-ga とされているが、ルガルイトゥダはギルとなって、捺印者ではない。マダガへの旅程に関係すると言うよりもマダガでのアスファルト購入か、何か別の用途のための木材であろう。

未だ確定的なことは言えないが、文書に現れる捺印者とギル職に注目することで、そこに記載された物品の用途が推定しうる可能性があると考ええる。

### III アスファルト管理と会計システム

フレインは、シュシン9年の年名「シャラ神殿を建てた年」を説明するなかで、その工事がシュシン2年に始まっていることを指摘する。フレインは続けて、この時期にマダガから輸入されたアスファルトが神殿造営に関係すると述べる [RIME 3/2,294]。常識的に言えばアスファルトが建築材料に使用されたことは容認できるにしても、ウンマのマダガ関係資料には神殿造営に直接関与する記述はない。マダガ行きはシャラ神殿の造営が始まってもないシュルギ治世から記録され、シャラ神殿造営とは直接関係しない隣国ラガシュでも恒常的にマダガに行っていた。それに関与する人も、ウンマではアッバギナとルガルイトゥダに限られており、しかも彼らがシャラ神殿造営と直接関係する証拠はなく、特別に派遣されたとは決められない。

マダガからのアスファルトとシャラ神殿造営を結びつける鍵となる人物にウルシュルパエがいる。彼は STA 11 によってマダガからのアスファルトを受領したことが確認できる人物である。彼からアスファルトが何処に支出されたかを見ることにする。

S 45 (ViOr 8/1, 26) lu<sub>2</sub>-ša<sub>6</sub>-i<sub>3</sub>-zu šu-ti, (mar-sa)

AS 4 (Gomi, Or 16, 86) DUB lu<sub>2</sub>-ša<sub>6</sub>-i<sub>3</sub>-zu, mar-sa-aš,

- AS 4 (TCL 5, 6036) nig<sub>2</sub>-šID-ak a-gu gašam  
 AS 8 (UTAMI 4, 2667) DUB lu<sub>2</sub>-kal-la; ki-a-nag ur-<sup>d</sup>nammu-še<sub>3</sub>  
 AS 8 vii (UTAMI 4, 2910) DUB a-kal-la; šu-du<sub>7</sub>-a gu<sub>4</sub> giš.apin 5-kam, ba-ab-su-ub  
 AS 8 xii (SNS 414) DUB lugal-ku<sub>3</sub>-zu, ma<sub>2</sub> inim-ma-ni ga<sub>2</sub>-ga<sub>2</sub>-de<sub>3</sub>,  
 AS 9 (MVN 16,664) lugal-ku<sub>3</sub>-zu šu-ti; mar-sa gu<sub>2</sub>-edin-na<sup>ki</sup>-še<sub>3</sub>  
 AS 9 Dr viii (MVN 18,146) DUB lugal-itu-da; e<sub>2</sub> ki-a-nag ur-<sup>d</sup>nammu  
 SS 1 (MVN 18,544) DUB a-gu  
 SS 2 vi (MVN 15, 26) DUB lu<sub>2</sub>-<sup>d</sup>nin-šubur: e<sub>2</sub>-te-na-e<sub>2</sub>-<sup>d</sup>šara<sub>2</sub>-ka du<sub>8</sub>-de<sub>3</sub>  
 SS 3 xi (TENS 190) lu<sub>2</sub>-ša<sub>6</sub>-i<sub>3</sub>-zu šu-ti, mar-sa-aš

シュシン2年第6月にウルシュルパエはシャラ神殿の基台を造るために(e<sub>2</sub>-te-na-e<sub>2</sub>-<sup>d</sup>šara<sub>2</sub>-ka du<sub>8</sub>-de<sub>3</sub>)アスファルトを支出している。マダガからのアスファルトがシャラ神殿造営に使用されたことがここから知られる。この表において注目すべきはマルサmar-saへの支出が目立つことである。マルサは造船関連施設であるが、多くの工房が付属していたと考えられ、ラガシュにおいてもアスファルトはマルサに集積されていた [MVN 2, 3]。

このマルサとシャラ神殿造営の両方に関与する者に文書管理官ウルシャラの子であるルガルニル(lugal-nir dumu ur-<sup>d</sup>šara<sub>2</sub> GA<sub>2</sub>-dub-ba)がいる。マルサとシャラ神殿造営に関連して、マダガのアスファルトから少々離れるがルガルニルに焦点を当てて検討したい。彼の兄弟であるウルヌガルur-<sup>d</sup>nun-galは、アマルシン8年から父のウルシャラを継いで文書管理官になったが [前田徹 2000 b: 17-31]、同時期のアマルシン8年からルガルニルの活動が記録されるようになる。ルガルニルの場合は、父の仕事である文書管理官を継承しないで、ウンマ市区のシャラ神に奉納される家畜・奴隷・物品を管理する役目に就いた。その奉納に関係する文書はシュシン8年まで存在する<sup>13)</sup>。

シャラ神の奉納に関与してから少したったシュシン治世の1年からルガルニルはマルサにも関わるようになる。その活動はシュシン8年まで確認される<sup>14)</sup>。マルサと同時に作業場

- 13) ルガルニルがシャラ神の奉納(mu-tum<sub>2</sub> <sup>d</sup>šara<sub>2</sub>)に関係する文書は次のような文書である。  
 AS 8 : MVN 16, 0906; UTAMI 1882; UTAMI 2139; Or 47/ 49 383  
 AS 9 : MVN 18,316 = AnOr 7,316; Nik 2 445; SNS 417  
 SS 1 : MVN 16, 0693; Or 47/ 49 393 (a-ru-a)  
 SS 2 : MVN 14, 449; MVN 16, 0776; MVN 16, 1156; TPTS 561; UTAMI 4,2566; UTAMI 4,2788; ŠA CLXV : 145 (a-ru-a); MVN 18,233  
 SS 4 : Or 47/ 49 419; BIN 5,002  
 SS 6 : MVN 16, 0844  
 SS 8 : MVN 16, 1104 (a-ru-a)  
 [ ] : MVN 18,264  
 なお、ルガルニルの前任者はノウアであった [前田 1997: 39-55]。
- 14) ルガルニルがマルサに関係する文書にはつぎのようなものがある。  
 SS [ ] : MVN 18,421  
 SS 1 : UTAMI 1660 ↗

(giš-kin-ti) に納入される葦についても捺印者となっている<sup>15)</sup>。マルサや作業場の物品の管理とは、シャラ神殿造営と関わる職種への拡大であると思われるが、そのシャラ神殿造営に関して、彼はシュシン5年から7年まで関係している<sup>16)</sup>。ルガルニルが関与するこれら三種の職掌について、その時間的順序を示すと次のようになる。

シャラ神への奉納 アマルシン8年～シュシン8年

マルサ シュシン1年～シュシン8年

シャラ神殿の建立 シュシン5年～シュシン7年

ルガルニルはシャラ神への奉納物を管理する役務に就き、そのうちシャラ神殿造営に関わって資材・物資の管理も引き受けることになったため、資材の主要な集積場所であるマルサに関与したのであろう。このように考えられるのであるが、史料的にはシャラ神殿造営に関わるのがマルサに関わるより遅くなっている。先の推定が正しいならば、むしろ、シャラ神殿造営に関与する時期がマルサに関与する時期と同時期か早い時期である方が、整合性があると思われる。その点を少し検討してみたい。

ウル第三王朝の第四代の王シュシンによるシャラ神殿建立は、彼の治世9年の年名に採用されており、竣工がシュシン9年であることは確実である。その着工時期についてフレインはシュシン2年としている。実際の造営記録は確かにシュシン2年から現れ、シュシン7年まで確認される<sup>17)</sup>。しかし、それよりも3年前のアマルシン8年に「シャラ神のエマフ神殿

- ↙ SS 2 : UTAMI 4,2681  
 SS 4 : UTAMI 1951 ; Nik 2,123, UTAMI 4,2365 ; MVN 18,369  
 SS 6 : Or 47/ 49 438 ; UTAMI 4,2739 ; TENS 156 ; ŠA XCIII : 77  
 SS 7 : MVN 16, 0834 ; SETUA 070 ; SETUA 169 (giš-kin-ti, mar-sa) ; MVN 14, 365  
 SS 8 : MVN 18,426  
 [SS 8?] : MVN 18,728  
 [ ] x 23 : TPTS 204
- 15) giš-kin-ti に関わる文書  
 SS 7 : UCP 9 / 2,2, 033 : gi, giš-kin-ti-a ku<sub>4</sub>-ra  
 SS 7 viii : MVN 18,678 : gi, giš-kin-ti-še<sub>3</sub>
- 16) シャラ神殿建立に際して、ルガルニルが捺印者として現れる文書。  
 SS 5 i : MVN 13, 276 ša<sub>3</sub>-gal dub-nagar-x [ ], giš-ka<sub>2</sub>-e<sub>2</sub>-<sup>d</sup>šara<sub>2</sub>-ka  
 SS 5 iv-ix : YOS 4 176 PN šidim, e<sub>2</sub>-<sup>d</sup>šara<sub>2</sub>-ka gub-ba  
 SS 6 iv-xiii : TYBC 1663 PN šidim, e<sub>2</sub>-šidim gub-ba, e<sub>2</sub>-<sup>d</sup>šara<sub>2</sub> gub-ba  
 SS 6 iv-xiii : PN šidim, e<sub>2</sub>-šidim gub-ba  
 SS 7 iii-xii : YOS 4, 177 PN šidim, e<sub>2</sub>-šidim gub [ ], e<sub>2</sub>-<sup>d</sup>šara<sub>2</sub>-x [ ]
- 17) シャラ神殿造営に関係する文書  
 SS 2 : BM 105548 (MCS 8, p. 95) : nig<sub>2</sub>-dab<sub>5</sub> temen e<sub>2</sub>-<sup>d</sup>šara<sub>2</sub>  
 TCL 5,5680 : e<sub>2</sub>-<sup>d</sup>šara<sub>2</sub>-ka temen si-ga  
 UTAMI 3, 1837 : e<sub>2</sub>-<sup>d</sup>šara<sub>2</sub>-ka temen-aš si-ga  
 MVN 13, 283 : šidim, e<sub>2</sub>-<sup>d</sup> [šara<sub>2</sub>-ka] gub- [ba]  
 Owen JCS 24,26 = MVN 15,26 e<sub>2</sub>-temen-na e<sub>2</sub>-x?-<sup>d</sup>šara<sub>2</sub>-ka du<sub>8</sub>-de<sub>3</sub>,  
 MVN 14, 187 : še-gin<sub>2</sub> : <sup>giš</sup>ba-KA-KA e<sub>2</sub>-<sup>d</sup>šara<sub>2</sub>-ka ba-ra-ab-du<sub>8</sub>  
 YOS 4, 178 : šidim-me, e<sub>2</sub>-<sup>d</sup>šara<sub>2</sub>-ka gub-ba ↗

の聖堂を建てるためのシスクル祭儀  $siskur_2 eš_3 e_2-maḥ_1 dšara_2 du_3-de_3$  [UTAMI 3, 1627] や「シャラ神殿を建てるために  $mu e_2-dšara_2 du_3-da-še_3$  [Or 47/49 377] という記事があり、シャラ神殿造営は、シュシンの前の王アマルシン治世の末に計画されていたと思われる。

シャラ神殿造営記事は、ウンマの行政経済文書のみならず、シュシンの王碑文にも記載されている。シュシンの王碑文の一つには、「ティドヌンを遠ざけるマルトゥの城壁を造り、そして——したとき、エシャゲパダ神殿、彼（シャラ神）の愛する神殿を、彼（シュシン）の生命のために建てた」とある<sup>18)</sup>。この銘文では二つが注目される。一つは、シュシン4年の年名「マルトゥの城壁を造った年」とその5年後の同9年の年名「シャラ神殿を造った年」に対応する記事が同一碑文に記載されていることであり、第二が、ウンマにおけるシャラ神の主神殿は通常エマフ ( $e_2-maḥ$ ) と称されるのであるが、この碑文ではシャゲパダ神殿 ( $e_2 ša_3-ge-pa_3-da$ ) とする点である。

第一の点について、フレインは、この碑文にある「シャラ神殿を造った」とは神殿造営の *terminus post quem*, 工事開始時期を示すものと捉えた [Frayne 1981: 277–278]。つまり、「マルトゥの城壁を造ったとき」＝シュシン4年にシャラ神殿の造営が着工されたと考えるのである。この解釈の場合、ウンマの行政経済文書が、シュシン2年にはシャラ神殿造営作業を行っていた確かな証拠を示すので、それとの整合性が問われる。一つの解決策としてシュシン4年以前のシャラ神殿の工事と、以後のそれとは別の作業であると区別して考える方法がある。

フレインの解釈とは別に、次のようにも考えることが出来る。シュシン2年からのシャラ神殿建立は王碑文にあるとおりシャゲパダ神殿の造営作業であり、それは4年に完成した。一方、シュシン9年の年名にあるシャラ神殿とはエマフのことで4年もしくは5年から建設が開始されたと。

どちらが正しい解釈かを定める根拠を示せない。しかし、確実なことはシュシン4年以前と以後においてシャラ神殿建設は別の様相を示したのであろう。ルガルニルが、マルサにおける資材の管理に加えて、シュシン5年以降になってはじめてシャラ神殿造営の労働にまで関与することになったのは、そうしたシャラ神殿造営の様相がシュシン4年を境に変化したためであると推定されるのである。

↙ SS 5 : MVN 13, 276 :  $ša_3-gal dub-nagar-x$  [ ] ,  $giš-ka_2-e_2-dšara_2-ka$   
 YOS 4, 176 :  $šidim, e_2-dšara_2-ka gub-ba$   
 SS 6 : CST 555 :  $šidim, e_2-šidim gub-ba$   
 MVN 13, 371 :  $i_3-ba šidim-e_2-dšara_2 gub-ba$   
 SS 7 : YOS 4 177 :  $šidim, e_2-šidim gub$  [ ] ,  $e_2-dšara_2-x$  [ ]

18) RIME 3/2, p. 328 : Šu-Šin 18, II. 20–30 :  $u_4 bad_3 mar-tu, mu-ri-iq, ti-id-ni-im, mu-du_3-a, u_3 gir_3 mar-tu, ma-da-ni-e, bi_2-in-gi_4-a, e_2-ša_3-ge-pa_3-da, e_2 ki-ag_2-ga_2-ni, nam-ti-la-ni-še_3, mu-na-du_3$

マダガからのアスファルトに話を戻すと、それらが直接神殿造営に使用されるのではなく、他の様々な資材とともにマルサに集積されてのち、そこから支出されたように、もう一段人手を介したのである。

### むすびにかえて

マダガからのアスファルトについては、それを採りに行く旅程や労働集団の人数などは、当時のウンマ文書から大略ながら明らかにできる。しかし、このアスファルトが代価を支払っての購入品なのかどうか、そうであるとすれば、代価は穀粉であったのか、大麦や銀であったのか、もし、代価を支払わないとすれば、アスファルト採取にはどのようなプロセスが考えられるのか、現地の統治者に採取の許可を得たのかどうか、こうした点は不明なままである。そうした点をウンマの行政経済文書から研究する場合、当時の会計システムにおいて、労働記録と物品記録の区別と、それに捺印者としてか、ギル職として関わるかという区分によって検討することが最低限必要であると思われる。

本稿では触れることが出来なかったが、ウンマの行政経済文書において、アスファルトを頻繁に記載する文書として、商人の会計簿がある [Snell 1982]。マダガのアスファルトと直接関連させられる文書が発見できなかったのであるが、次のような可能性が推測される。アスファルトを求めてマダガに行く労働集団に商人は同道して、アスファルトそのものを管理したのが商人であったと。今後の研究を待たねばならない。

\* 本稿は、1999年度早稲田大学特定課題研究「マダガからのアスファルト買い付け」(99A-81)の成果である。

### 参考文献

- シュメール語行政経済文書の略号については、前田徹「シュメールの奴隷」『北大史学』第35号(1995)に付した略号表を参照。
- 近年刊行分については以下に示すような略号を使用する。
- AAICAB: Grégoire, J.-P., *Archives administrative et inscriptions cunéiformes de l'Ashmolean Museum et de la Bodlleian Collection d'Oxford*, I: Contribution à l'histoire sociale, économique, politique et culturelle du proche-orient ancien, Paris, 1996.
- TCTI 2: Lafont, B. & Yildiz, F., *Tablettes cunéiformes de Tello au Musée d'Istanbul 2*, Leiden, 1996.
- TYBC: Sigrist, M., *Texts from the Yale Babylonian Collections*, 2 Pts, Bethesda, 2000.
- UTAMI 4: Yildiz, F. & Gomi Tohru, *Die Umma-Texte aus den Archäologischen Museen zu*

Istanbul, Band 4 (Nr. 2301 – 3000), Bethesda, 1997.

RIME: The Royal Inscriptions of Mesopotamia. Early Periods. Toronto

3 / 1 : Edzard, D. O., *Gudea and his dynasty*, 1997.

3 / 2 : Frayne, Douglas R., *Ur III Period*, 1997.

前田 徹 (1997) ウル第三王朝時代のウンマにおける神殿への奉納 『早稲田大学文研紀要』 42 (4), 39 – 55.

前田 徹 (2000 a) ウル第三王朝時代ウンマにおける舟の運行と管理 『オリエント』 42 (2), 80 – 94.

前田 徹 (2000 b) 「ウル第三王朝時代ウンマの文書管理官 GA<sub>2</sub>-dub-ba」 『早稲田大学文研紀要』 45 (4), 17 – 31.

Frayne, D. (1999) The Zagros Campaigns of Šulgi and Amar-Suena. In: Owen, D.I. et al, (eds.), *Studies on the Civilization and Culture of Nuzi and the Hurrians*, vol. 10, : *Nuzi at Seventy-Five*, Bethesda, 141 – 201.

Snell, Daniel C. (1982) *Ledgers and Prices. Early Mesopotamian Merchant Accounts*, New Haven.

(早稲田大学文学部)